

移動動詞「行く/来る」文と日本語話者の視点 —中国語との対照研究を念頭に置いて—

古賀 悠太郎

神戸市外国語大学・院

1. はじめに

1.1 問題の所在

言語学の世界において、「視点」をキーワードにした研究はますます活発になっている。本発表で主に扱う移動動詞文も「視点」概念で説明されることが多い。

しかし、言語学における視点の定義は曖昧であり、研究者によって視点という術語の使い方が少しずつ異なるため、同じ基準で議論を進めることが難しくなっている。また、言語間の対照研究を念頭に置いた場合、言語 A における視点と言語 B における視点も意味合いが異なっていると思われる。

そこで本発表では、日本語を中心としながら中国語との対照研究も念頭に置きつつ、まず日中両語における「視点」概念の定義を明確にするところから着手して、それぞれの言語の移動動詞文に視点がどの程度関与しているのかを調査・分析し、日中両語の「視点」の体系の一端を明らかにすることを目標にしたい。

1.2 仮説

- ☞「視点」の定義を明確にすることは重要であるが、本発表では、「視点」概念を無理に一義的に定義することは避ける¹。その結果、↓↓
- ☞日本語の移動動詞文には「共感度視点」と「参照点視点」の二つの視点の関与が認められると思われる（これら二つの視点は、中国語の移動動詞文の用法の説明には有効ではない）。
- ☞一方、中国語の移動動詞文の説明には、基本的には「基準点視点」²という一つの視点概念のみで十分であると思われる。
- ☞このままでは、日本語と中国語という二つの個別言語についての調査・分析に過ぎないが、最後に話し手の「ホームベース」の概念（大江(1975)）に立ち返ることで、日中両語の移動動詞文に関与する視点の体系の違いは、「話し手のホームベースの質とその拡大の仕方の違い」に集約されるのではないか、というのが本発表の最も重要な仮説（主張）である。

¹ この点については、先行研究における「視点」の諸概念を丁寧に整理している渡辺(1999)や、アスペクトの規定に関して「一義的に定義しようとすれば、限りなく規定の抽象度を上げなければならない、従って、無規定に近くなってしまう」と鋭く指摘している工藤(1995:38)が大いに参考になった。

² 本発表では、「基準点視点」と「参照点視点」は全く異なる概念であると捉えている。また、「共感度視点」、「参照点視点」、「基準点視点」それぞれの定義について詳細は後述。

2. 日本語の移動動詞文と視点

2.1 日本語研究における視点の定義

☞これまでの研究において、日本語の移動動詞文の説明に用いられてきた視点は「共感度視点」と「参照点視点」の二つに大別できると思われる。

☞「共感度視点」とは、共感度（話し手の話し手自身に対する心理的距離が一番近いという原則、久野(1978)）が関係する視点。

☞移動動詞文に共感度視点が関与していることを認める条件は、以下の規定(01)および「発話当事者の視点ハイアラキー³」が明確に「行く/来る」の用法を制限していること。

(01) 移動動詞「行く/来る」の選択の基準は、話し手が「移動行為者」(人)に共感するか、「移動先」(場所)に共感するかによる。

「来る」: $E(\text{移動先}) > E(\text{移動行為者})$

「行く」: $E(\text{移動行為者}) \geq E(\text{移動先})$

つまり、以下のような例では共感度視点の関与が認められることになる。

(02) 私がそっちへ {行く/*来る}。 $E(\text{私}) \geq E(\text{そっち})$

(03) 田中君がこっちへ {*行く/来る}。 $E(\text{こっち}) > E(\text{田中君})$

☞「参照点視点」とは、話し手が発話行為を行うときに「どこを基準点とするか」が関係する視点。

☞本発表では、移動動詞文における参照点視点の関与を認める条件は、「視点の移行⁴」が関係している必要があると考える。ちなみに、「視点の移行」とは、ここでは以下のように規定される。

(04)a 「話し手の現在位置」への移動ではないにも関わらず、「来る」が使用される。

b 「話し手の現在位置」への移動であるにも関わらず、「行く」が使用される。

つまり、次のような例では参照点視点の関与が認められる。

(05) 私が {*行って/来て} からパーティーを始めてくれ。

(06) (東京で) あの時もうすでに東京に {行く/?来る} ことが決まっていた。

☞ただし、これら二つの視点は、まずは分けて考えるべきであるが、完全に独立した概念ではない。

☞たとえば、ある移動動詞文における共感度視点の関与は、即座に参照点視点の関与を排除するものではない。したがって、共感度視点・参照点視点の関与の強弱を決定する規定も必要である。

³ $1=E(\text{一人称}) > E(\text{二・三人称})$ という規定 (久野(1978:146))。ここで、第二人称と第三人称が明確に区別されていないという点が注目に値する。

⁴ 管見の限り、「視点の移行」という術語を初めて用いたのは大江(1975)である。ただし、本発表において「視点の移行」が意味するところは、大江(1975)のそれとは若干異なるものである。

☞ 視点の関与の強弱を決定する尺度は以下の二つ。

① 共感度視点・参照点視点の片方のみの関与が認められ、他方の関与は認められないこと。

② 移動動詞「行く/来る」の片方のみで使用可能で、他方は容認不可能であること。

☞ 以下、便宜上、あらゆる移動の事態を大きく四つに分類した上で（それぞれ、第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ類と呼ぶ）考察を進めていく。

2.2 第Ⅰ類——話し手自身の移動／話し手の現在位置への移動

☞ 第Ⅰ類では、〈移動行為者〉話し手自身 → 〈移動先〉聞き手の現在位置／その他の場所
〈移動行為者〉聞き手／第三者 → 〈移動先〉話し手の現在位置
が、考察の対象となる。

(07)a 今からそっちへ {行きます/*来ます}。

b 来週京都へ {行きます/*来ます}。

(08)a できるだけ早くこっちに {*行って/来て} ください。

b 今から田中がこっちに {*行く/来る} から、ちょっと待ちましょう。

☞ 第Ⅰ類の移動には共感度視点が強く関与する。

2.3 第Ⅱ類——話し手側に属する場所への移動

☞ 第Ⅱ類では、聞き手／第三者の移動が考察の対象となる。

☞ 日本語では第Ⅱ類にも共感度視点がやや強く関与する。それは、話し手の現在位置に準ずるから。ただし、移動先の種類によって共感度視点の関与の強弱が異なる。

☞ 移動先：話し手の「恒常的な位置」 > 「心理的帰属先」⁵

☞ 恒常的な位置への移動の例。

☞ 恒常的な位置には、「『私のところ』 > 住んでいるところ > 勤務先・学校など > よく出入りする場所…」という階層がある。

(09)a 古賀君。ちょっと私のところに {*行きなさい/来なさい}。

b なにかあったらいつでも私のところに {*行きなさい/来なさい} ね。

(10)a 来週にでも、ぜひ（私の）^{うち}家に遊びに {*行って/来て} ください。

b 来週田中君が（私の）家に遊びに {*行く/来る} そうです。

(11)（話し手は「京阪神新聞」という新聞社に勤務している。）

a 昨日うちの新聞社に {*行った/来た} そうですね。

b 昨日京阪神新聞に {?行った/来た} そうですね。

(12)（話し手は沖縄料理屋「金魚」の常連客。）

「金魚」は僕もよく行く店だし、もしよかったら今度 {行って/??来て} みてくださいよ。

⁵ 「恒常的な位置」と「心理的帰属先」の概念については、張芑蕾(2009:18)を参照のこと。

☞心理的帰属先への移動の例。

(13) (話し手は中国人。日本での会話。聞き手は日本人。)

来年中国に留学に {行く/?来る} そうですね。

ただし、話し手の「誘い」が関係する場合、話し手は「場所」に視点を寄せる。

(14) (場所は日本。中国への帰国に先立ち、中国人が日本人に対して。)

いつか中国に {*行つて/来て} くださいね。 (下地(2004))

☞第Ⅱ類にも、(第Ⅰ類よりは弱い) 共感度視点の関与が認められる。

☞なお、第Ⅱ類については、「来る」の使用は話し手側に属する場所への「視点の移行」が起こっているからであるとして、参照点視点の関与を認める立場も成立する。

☞本発表では、第Ⅱ類と次に考察する第Ⅲ類は共感度視点と参照点視点の狭間の「グレーゾーン」であると考えておく。

☞第Ⅱ類は共感度視点寄り、第Ⅲ類は参照点視点寄りであるが、その理由は後述。

2.4 第Ⅲ類——未来／過去における話し手位置への移動

☞第Ⅲ類には、参照点視点のやや強い関与が認められる。

☞未来における話し手位置への移動の例。

(15)a 来週京都に行くんだけど、僕が着いたら君も {*行つて/来て} ください。

b 来週京都に行くんだけど、僕が着いたら田中も {*行きます/来ます}。

(16) 来週札幌にスキー旅行らしいですね。私もそのときちょうど札幌にいますから、
{*行ったら/来たら} また連絡してくださいね。

話し手が視点を移行させる要因は、「移動行為者を迎え入れる立場にあること」。

☞過去における話し手位置への移動の例。

(17) (遠くの建物を指差して。話し手は昨日その建物にいた。)

昨日あそこに山田が {*行つた/来た} よ。 (下地(2004))

(18) 昨日の同窓会、君も {?行つてた/来てた} みたいだね。会場で見かけたよ。

(19) 先週京都に行きましたが、京都では、酒井法子が {行つた/来た} お店に行きました。
(張芑蕾(2009))

話し手が視点を移行させる要因は、「移動行為者の移動の事実を確認できること」。

☞しかし、未来／過去における話し手位置も「話し手側に属する場所」の一種であると考えられるなら、「来る」の使用は共感度視点に関与している証拠とみることもできる。

☞第Ⅲ類はグレーゾーンながらも参照点視点寄り。

☞根拠：共感度とはそもそも静的なもので、「文脈や状況に影響されずに安定している」べきものである (定延(1996))。

☞未来／過去における話し手位置は「動的」 ⇒共感度視点の関与を認め難い

☞話し手側に属する場所は「静的」 ⇒共感度視点寄り

2.5 第Ⅳ類——話し手の現在位置への移動（の一部）など

☞第Ⅳ類には参照点視点が強く関与する（ただし、実例は著しく少ない）。

☞話し手の現在位置への移動に「行く」を用いる例。

(20)（電話／メール。話し手は今「学校」に居るが、聞き手は「学校」以外の場所に居る。）

今日学校に {行きます/来ます} か。

(21)（日本での会話。話し手は日本に留学中の中国人留学生。）

北京にいた時、あるプロジェクトに学生代表として参加しないかという話があったのですが、その時すでに日本に {行く/?来る} ことが決まっていたので……

(22)（神戸に住んでいる人が、旅行で一時的に京都に居る。）

神戸と京都はそれほど遠くないんだけど、なかなか京都に {行く/来る} 機会ってないんですよね。

☞例(20)で「行く」を用いるのは明確な共感度違反。例(21)・(22)も「行く/来る」の選択に共感度の制約が積極的に関与しているとは言い難い。⇒参照点視点の関与を認める⁶

☞<移動行為者>話し手自身 →<移動先>聞き手の現在位置 の移動に「来る」を用いる例。

(23) 僕が {行く/来る} まで待っててください。

2.6 本節のまとめ

共感度視点 (強) ----- (弱)

第Ⅰ類 ←----- 第Ⅱ類 ----- 第Ⅲ類 -----→ 第Ⅳ類

(弱) ----- (強) 参照点視点

※ただし、第Ⅳ類の例は著しく少ない。

3. 中国語の移動動詞文と視点

3.1 中国語研究における視点の定義

☞これまで中国語の移動動詞文の説明に用いられてきた視点は、移動動詞“去/来”（日本語の「行く/来る」に相当）を選択する際に「どこを基準点とするか」という意味における視点。⇒本発表の用語法で言えば「参照点視点」

☞しかし、中国語における「参照点視点」と日本語における「参照点視点」は意味合いが異なる。⇒中国語の“去/来”の用法を規定する視点をここでは「基準点視点」と呼ぶ

☞基準点視点の大きな特徴は、視点の移行が関係する必要がないこと。

☞中国語の移動の事態のほとんどが、基準点視点で説明できる。

⁶ 本発表では、「行く」を用いる場合は参照点視点が関与しており、「来る」を用いる場合は共感度視点が関与しているという説明は避けたい。このような説明を認めるならば、「行く/来る」の使用を根拠に共感度視点・参照点視点の関与を認めることになり、一方では視点の関与の仕方を根拠に「行く/来る」の使い分けを説明することになってしまう。これは循環論であり、何も説明していないのと同じである。

3.2 第Ⅱ類の移動と基準点視点

☞第Ⅱ類の移動の場合、日本語では共感度視点が関与して「来る」が選ばれる傾向が強い。

中国語では“去/来”ともに使用可能である。

☞中国語では共感度視点が（日本語の場合ほどには）活躍しない。

☞基準点視点が出発点のみならず、到着点に置かれることもあると説明される⁷。

(23)a 古贺！你 { *去/来 } 一下！

b 如果有什么问题，你可以随时 { *去/来 } 我这里。

(24) 请你下周 { 去/来 } 我家玩吧。（日本語：「*行く/来る」）

(25)（说话人在“京阪神新闻社”工作。）

a 听说你昨天 { 去/来 } 我们公司了。（日本語：「*行く/来る」）

b 听说你昨天 { 去/来 } 京阪神新闻社了？（日本語：「?行く/来る」）

☞「私のところ」（我这里）への移動のみ、共感度視点の関与を認めることもできる。しかし、以下、「住んでいるところ」、「勤務先・学校など」への移動では、日本語とは異なり“去/来”ともに使用可能である。⇒基準点視点で説明される

3.3 第Ⅲ類の移動と基準点視点

☞第Ⅲ類の移動の場合、日本語では参照点視点に関与して「来る」が選ばれる傾向が強かった。中国語では“去/来”ともに使用可能である。

☞中国語では参照点視点の活躍の場も広くない⁸。

(26) 下周我去京都，我到了之后你也 { 去/来 } 京都。

(27) 听说你下周去札幌滑雪，那时候我也在札幌，你 { 去/来 } 了就跟我联系。

(28) 昨天的同窗会你也 { 去/来 } 了吧？好像在会场看见你了。

(29) 上星期我去了京都。在京都我去了酒井法子 { 去/*来 } 过的商店。（張芑蕾(2009)）

☞視点の移行に関与しない以上、基準点視点を用いて、視点（基準点視点）が出発点・到着点のどちらに置かれる可能性もあると説明される。

☞中国語の移動動詞文と視点の考察に、共感度視点・参照点視点という枠組みはほとんど意味をなさない。

3.4 話し手の現在位置・聞き手の現在位置への移動

☞中国語の移動の事態をすべて基準点視点で説明するのは必ずしも適切ではない。

⁷ “去/来”の使い分けについてこのように説明するなら循環論である。しかしここでは、話し手に属する場所への移動にはどのような視点に関与しているのかという問いに対して、基準点視点の概念以外では適切に説明できないと答えているのである。個別具体的な移動の事態について視点の概念で説明しようとしているわけではないので、循環論にはならない。

⁸ ただし、張芑蕾(2009)は、次のような例を挙げて、中国語でも視点の移行は起こりうるということを指摘している。

(i) 我 2006 年去美国留学，2008 年小王也 { 去/来 } 了。

(ii) 昨天我在那儿的时候，山田也 { 去/来 } 了。

しかし、この場合の視点の移行は、“来”を許容するものではあるが、同時に“去”を排除するほど強力なものではない。したがって、中国語では参照点視点が日本語ほどには活躍しないと言える。

☞第Ⅰ類の移動では共感度視点の関与を認めることもできる。

(30) 请你尽快到我这里 { *去/来 }。

(31) 现在我 { 去/*来 } 你那里。

☞また、聞き手の現在位置に話し手自身が移動する場合、日本語よりも中国語のほうがむしろ視点の移行が起こりやすい。

(32) 请你等到我 { 去/来 } 为止。

(33) “古贺！你来一下！” “好！马上就 { 去/来 }！”

☞ただし、これは中国語にも参照点視点に関与する移動の事態が多少は存在するという証拠ではない。

☞移動行為者が話し手自身であるにも関わらず、話し手自身を差し置いて移動先（聞き手）の側に視点の移行させるという説明は、いささか説得力に欠ける。

☞「話し手と聞き手の共有の場所」（話し手の現在位置と聞き手の現在位置を合わせた領域）とでも呼ぶべき概念で説明したほうが明快である。

☞例(32)-(33)で“来”が選ばれるのは「共有の場所」への移動であるから。一方、これに該当しない場所への移動では“去”が選ばれる⁹。

☞ただし、移動行為者が第三者の場合、聞き手の現在位置への視点の移行は起こらない。

(34) (电话) 田中 { 去/*来 } 了你那里之后，你们开始行动吧！

4. 日中両語における「視点」概念の連絡

☞議論がここでとどまっては、日本語と中国語という二つの個別言語について考察したに過ぎない。

☞ここまで、「視点」概念を無理に一義的に定義することを避けてきた結果、共感度視点・参照点視点・基準点視点という三つの概念を認めることになった。

☞本発表の最後に、これら三つの概念の関連性を見出すことで、今後は統一された基準で日中両語の移動動詞文と視点に関する議論が行えるよう枠組みを整えることを考える。

☞大江(1975)の話し手の「ホームベース」の概念に立ち返る。

行く：「話し手または他者が話し手のホームベースを出発して動く。その動きを話し手が出発点から眺め、描く」動詞。

来る：「話し手が自らのホームベースに位置し、話し手または他者の動きをその場所（到達点）への動きとして眺め、描く」動詞。
(大江(1975:45))

☞移動先が話し手のホームベース内にある移動には「来る」（来）を用い、それ以外の移動

⁹ これは、下地(1997:133)が、中国語の場合「対話の現場における『“咱们”の領域』に視点が置かれ、そこを中心に移動動詞を選ぶ傾向が強い」と指摘しているのと基本的には同じことである。また、山口(2011:211)はこの領域のことを「対話空間」と呼び、英語において「come は到着点に対話空間内にある移動を表す」としている。この考え方も本発表にとって大いに参考になったのだが、中国語の“来”の用法と英語の“come”の用法がどの程度似ているのかについてはさらに慎重に検討する必要がある。

には「行く」(去)を用いる。

☞「ホームベース」の概念に立ち返ることで、「行く/来る」と“去/来”の違いは次のように説明される。↓↓

☞日中両語における移動動詞の用法の差異は、ホームベースの質とその拡大の仕方の違いによる。

- ①「話し手の現在位置」が絶対的なホームベースになるのは日中両語で共通。
- ②日本語では、「話し手の現在位置」→「話し手側に属する場所」(静的ホームベース)
→「未来／過去の話し手位置」(動的ホームベース)へと拡大。
- ③中国語では、「話し手の現在位置」→「共有の場所」へと拡大。

5. おわりに

本発表では移動動詞文に関与する視点についての日中対照研究を試みた。その結果、第一段階としては共感度視点・参照点視点・基準点視点という三つの概念を個別に認めることになった。しかし、最終的には「ホームベースの質とその拡大」という考え方によって日中両語における移動動詞文と視点の考察に統一された枠組みを準備することができた。

とはいえ、「ホームベース」の概念に立ち返ることにより、ホームベースの拡大の段階はそのまま共感度視点の関与の強弱に平行するという見方が発生する。これを採用すれば、参照点視点の概念はもはや必要ないということになる。本発表では「静的／動的」の区別を根拠に共感度視点と参照点視点の境目を設けたのだが、両者の区別は本当に必要であるか、また、必要であるとすれば区別することで今後の研究にどのように寄与できるのか。この点は再度慎重に検討する必要がある。

【参考文献】

- 大江三郎(1975)『日英語の比較研究——主観性をめぐって』南雲堂
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト——現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房
- 久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店
- 定延利之(1996)「遠近の言語学」『月刊言語』5月号
- 下地早智子(1997)「移動動詞に関わる『視点』の日中対照研究」『中国語学』244
- 下地早智子(2004)「日中両語における文法事象としての視点の差異——移動動詞・受身の表現・テンス／アスペクトの場合——」『外国語研究』58 神戸市外国語大学外国語学研究所
- 張芑蕾(2009)「視点移行と移動動詞の選択に関する日中対照研究」『現代中国語研究』11
- 彭広陸(2008)「類型論から見た日本語と中国語——視点固定型の言語と視点移動型の言語」『中日理論言語学研究会第 12 回研究会発表論文集』
- 山口治彦(2011)「第 12 章 英語との対照」『はじめて学ぶ日本語学——ことばの奥深さを知る 15 章——』益岡隆志[編著] ミネルヴァ書房
- 渡辺伸治(1999)『「視点」諸概念の分類とその本質』『大阪大学言語文化研究』25